

格闘技とスポーツから見る今後の女性の社会

Social studies judging from sports and a martial art

1K03B096-8

佐藤 直樹

指導教員

主査 リー・トンプソン先生

副査 宮内孝知先生

1. 研究の目的

序章の「研究の目的」の項では、現代のテレビの放送のあり方や実際に取ったアンケートを基に、打撃系の格闘技を特に取り上げる意義を掘り下げる。男性と女性はそもそも全く別の生き物であり、メディア側としても全く同様に扱うことは不可能である。男女がどのような歴史を紡いできたか、そして現代の日本において男女がお互いに持つ意識差とは何か、ということを実際に取ったアンケートを基に検証した。その結果、やはり少なくとも現代日本においては、男女は社会的な扱いも意識も異なっていることがはっきりし、この研究が、実際に進める価値の有るものだとはっきりした。

2. 私自身のメディアに対する考察

かつて、私が受講しているゼミで、「メディアとは本質的に一体何なのか、そしてメディアの本来の役割とは何か」ということを8つの視点から考えさせられる課題が出されたことがあった。その8つの質問について自分なりの見解を述べた上で、更に「女性のスポーツにおけるメディアの存在意義や役割」について自分なりに考察し、1章に続いて研究の目的をはっきりさせた。私自身は、メディアは、人間というフィルターを通す以上どうしても偏る物だと思っているが、偏っているのだということを情報の受け取り手が気づかねばならないものだと思っている。特に男女のスポーツ報道に関しては偏りが顕著に現れやすいものであるし、現代もそれが原因で様々なトラブルがおきている。格闘技とスポーツから今後の女性の社会を見るに当たって、メディアの本質的な存在価値や役割をはっきりさせることはどうしても必要であったので、この章ではっきりとさせた。

3. 歴史に基づく考察

そもそも人類が地球上に登場したのが4万年前のことである。2足歩行で、頭を使って狩猟や農業をすることを覚えた人類は、男性が先頭に立って積極的に狩猟活動を行った。体を使って動き回る機会はいまだに男性のほうが圧倒的に多く、女性は生理や出産など肉体的な問題により、男性ほど体を使う仕事に従事しているわけではなかったと考える。そこから端を発し、女性はスポーツという土俵の上において男性の力により十分に力を発揮できる場所を与えられなかった。女性が現代のスポーツに本当に参加するようになったのはやっとここ数十年のことである。その数十年という短い期間の中で、今最前線で活躍してい

る選手が存在する

スポーツ3つを含めた4つのスポーツを取り上げ、検証する。特に興味深かったのは柔道とビーチバレーボールであり、柔道において谷亮子選手は女性としての強さ、結婚後の女性の強さ、母としての強さを証明し、

今後の女性の可能性を大きく指し示した。ビーチバレーボールに関しては2007年に女性スポーツ界に大きく影響を与えた浅尾美和を中心に研究したところ、今のスポーツメディアがビーチバレーボールという競技において浅尾美和選手を一種のアイドルとして取り扱っていることが明らかになった。

4. 検証による考察

この項で考察したいのは、メディアによる女性の報道の方法について、そして、情報の受け手が女性のスポーツや格闘技をどのようなものとして捕らえているかという実際に取ったアンケートを基に女性スポーツや格闘技を検証した。実際に取ったアンケートは「女性がスポーツをすることについてどう思うか」「女性が格闘技をすることについてどう思うか」「女性が打撃系格闘技をすることについてどう思うか」「男性が打撃系格闘技をすることについてどう思うか」の4つであり、そこから女性のスポーツに対する世論を把握した。

5. 総括・まとめ

結局、この論文において自分が最も言いたかったことは、2つである。

1つは、試してみる前に女性の可能性を摘み取らないことだ。特に日本は封建的な男性上位社会を長い時間築いてきたので、今女性が台頭してくることはあまり望ましくないと感じる人間も多いだろう。しかし、女性の可能性を試すことは日本人の国力の底上げになり、ひいては男性自身のためにもなる。結果はどうあれ機会を与えることが重要であると私は考える。もう1つは、挑戦すること、そして競い合うことの価値だ。スポーツ選手は誰もがそうだが、女性選手は、ここ2、30年、未知のスポーツという分野にチャレンジし、その成果を確実にあげてきた。

自分の境遇から限界を勝手に設定せず、何事にも挑戦する精神を、今日の女性アスリートからは学ぶことができるはずだ。

6. 参考文献、参考 URL

参考にした文献と URL の詳細である。